

# 茅野市 八ヶ岳通信

■ 尖石縄文考古館

## 尖石縄文考古館のホームページ 装いも新たに公開

茅野市には、遺跡の国宝に相当する国指定特別史跡「尖石遺跡」や国宝「土偶」（縄文のビーナス・仮面の女神）など、世界に誇る縄文時代の遺産があります。

こうした茅野市の「宝」である「縄文」をまちづくり・ひとづくりにいかすため、縄文プロジェクトを市民の皆さんと共に進めています。

今回は、「縄文」を広める取組のひとつで、昨年12月にリニューアルした尖石縄文考古館のホームページをご紹介します。

これまでのホームページでは、主に考古館の利用や展示・イベント情報を中心に掲載していましたが、これらの基本的な情報に加え、縄文プロジェクトの理念である「縄文の価値を識(し)り、これを意識したまちづくり・ひとづくり」に資する情報をたくさん盛り込むこととしました。

すべてご覧いただきたいのですが、特にお薦めは、昭和初期から尖石遺跡の発掘と保存に情熱を注いた宮坂英式先生の業績を紹介する「宮坂英式の軌跡」です。

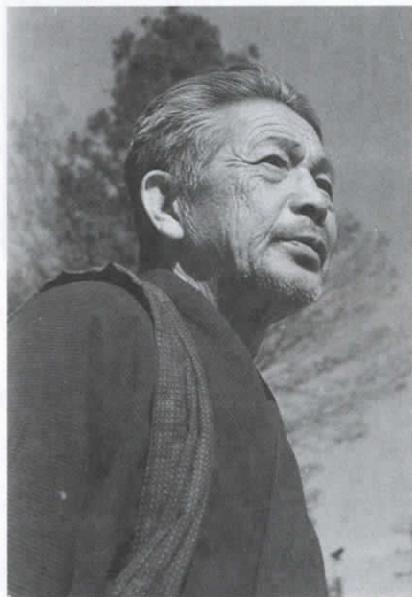
宮坂先生は茅野市の埋蔵文化財行政の基礎を築くとともに、「縄文」によるまちづくり・ひとづくりを実践した先駆者として知られています。先生がいなければ、尖石遺跡の特別史跡の指定や尖石縄文考古館の建設はもちろん、国宝「土偶」も発見されていなかった、といつても過言でない、茅野市が誇る市民のひとりなのです（昭和42年茅野市名誉市民賞受賞）。

そんな宮坂先生の業績を、はじめての方でも読みやすく、造詣の深い方を「なるほど！」とうならせる内容で紹介しています。また、皆さんが日常生活の一部として利用している運動公園やグリーンライン（広域農道）といった、身近な場所にある縄文遺跡も掲載していますので、ご一読いただければと思います。

新装なったホームページをご覧いただき、縄文時代に思いを馳せに、尖石縄文考古館ならびに尖石遺跡に足を運んでみてはいかがでしょうか。



リニューアルした尖石縄文考古館ホームページのトップページ



宮坂英式先生

# 宮崎龍介・柳原白蓮と蓼科

八ヶ岳総合博物館では、平成27年9月12日から11月23日まで、企画展「宮崎龍介・柳原白蓮と蓼科」を開催しました。

柳原白蓮（本名 煉子 1885-1967）は明治～昭和に活躍した歌人です。夫の宮崎龍介（1892-1971）は、革命家 宮崎滔天の子として生まれ、弁護士、社会活動家として活躍しました。白蓮と龍介の駆け落ち事件は、話題になりました。

宮崎夫妻のご令嬢である宮崎蘿蔔氏によると、宮崎家の別荘が、昭和6年（1931）に蓼科に作られました。別荘が蓼科に作られたのは、子息の香織が病弱だったため、別荘を探していたところ、蓼科に別荘をすでに作っていた鯉沼という名古屋大学の医師から、勧められて建てたといいます。

蓼科に、別荘を建てた後、地元の人々と、宮崎夫妻は深く関わっていきます。

昭和9年（1934）10月25日付矢崎利一郎宛宮崎龍介書簡（矢崎利彦氏所蔵）によると、当時湯川区で「生産体」という団体を作り、工業を興して木工を行っていたようですが、発展させるためにどうしたらよいか、宮崎龍介にアドバイスを求めていたようです。

昭和12年（1937）に、宮崎龍介が廬溝橋事件の中国との和平工作のため、近衛文麿首相の特使として派遣されますが、神戸で憲兵隊に拘束され、東京の宮崎家が家宅搜索をうけたということがありました。この時に、子供たちに危害がないようにと、白蓮が蓼科の別荘に避難させたということがありました。

宮崎家に関連して、大徳寺の中村戒仙和尚とその妻章子たちが、蓼科に庵を作ったと言います。宮崎蘿蔭氏によると、別荘の人たちがお金を出し合って、庵を建てたということです。

宮崎家の別荘の建物は、窓が印象的ですが、この窓は、もともと紀州徳川家の南葵文庫の窓だったそうです。南葵文庫は、東京の麻布飯倉にあり、紀州徳川家の書籍や宝物類を収蔵していたそうですが、関東大震災により大破し、建物が売りに出されました。そのうち、窓の一部を購入して宮崎家や上田酒造の別荘に使用されたそうです。

宮崎家の別荘は、昭和28年（1853）に蓼科湖畔に移築され、宮崎家と親交の深い矢崎善美氏に提供さましたが、その後取り壊されました。

展示では、宮崎家と交流の深い方のお宅にある掛け軸なども展示了しました。

10月12日に、宮崎龍介、柳原白蓮の御息女であります、宮崎蘿蔭氏、お孫様の宮崎黄石氏を、当館にお招きいたしまして、トークショーを開催いたしました。別荘を蓼科に建てた経緯や、蓼科での生活、ご両親である、宮崎龍介、白蓮と地元の人たちや、別荘の人たちとの交流などについてお話ししていただきました。

また、昔の蓼科に詳しい柳沢徳一氏、宮崎家と交流の深い矢崎みや子氏、矢崎美一氏に、コメントをいただきました。



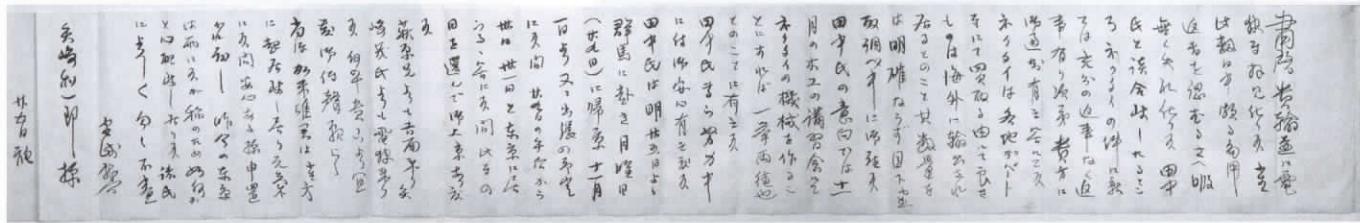
建設中の別荘の前にて  
(右から宮崎龍介・香織・白蓮・蘿蔭)  
写真:矢崎真一氏、宮崎黄石氏提供



トークショーの様子(10月12日)  
左:宮崎蘿蔭氏 右:宮崎黄石氏



トークショーの会場の様子



昭和9年(1934)10月25日付 矢崎利一郎宛宮崎龍介書簡(矢崎利彦氏蔵)

## 茅野市ミュージアム活性化事業

茅野市内のミュージアムは、その文化資源を活用しながらそれぞれに活発な運営をしていますが、個別の活動となってしまっています。このことから、ミュージアムの連携強化により、文化資源を効果的に活用し、地域の観光振興および地域の活性化に資することを目的とする、茅野市ミュージアム活性化推進委員会が組織されました。平成24年度からはじまり4年目となる本年度も、設置者が異なる様々な分野の6館（茅野市尖石縄文考古館、茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館、茅野市美術館、京都造形芸術大学附属康耀堂美術館、蓼科高原美術館・矢崎虎夫記念館）による茅野市ミュージアム活性化事業を行ない、茅野市の玄関口とも言えるJR茅野駅に隣接する文化複合施設・茅野市民館内にある茅野市美術館を事業展開の拠点としました。

本年度は事業テーマを「ミュージアムから出かけよう」としました。そして、同事業による連携事業として、①ちのミュージアム・スタンプラリー（7月～11月、6館中3館のスタンプを集めると特製ぬぐいをプレゼント）、②ちのミュージアム・インフォメーション（7月～11月、6館の紹介と地図の大看板、ロビーにパネルなどを展示）、③ワークショップ&講座が大集合！（8月、全3回、各館が協同して担当）、④ちのミュージアム・コンシェルジュ講座（10月、観光事業に携わる方、まちおこしに興味のある方対象 講師：山根宏文（松本大学観光ホスピタリティ学科教授））、⑤ちのミュージアム・ピクニック（10月、全3回、各館と市内のおすすめスポットをバスで巡る）、⑥シンポジウム「ミュージアムから出かけよう」（11月）を行ないました。シンポジウムの第1部は酒井忠康氏（世田谷美術館館長、美術評論家、美術館連絡協議会理事長）と藤森照信氏（建築史家・建築家、東京大学名誉教授）によるトークセッションを、第2部のパネルディスカッションではパネリストに既出のお二人と、岩崎和子氏（縄文プロジェクト実行市民会議 楽しむ部会 部会長）、守矢昌文（茅野市尖石縄文考古館館長）、辻野隆之（茅野市美術館長）を、コーディネーターに徳永高志（茅野市民館コアアドバイザー）を迎えました。

①ちのミュージアム・スタンプラリーはミュージアムに馴染みの薄かったであろう子どもから高齢者までの幅広い年齢層の市民や観光客の参加がありました。②ちのミュージアム・インフォメーションはJR茅野駅の東西通りに面しているイベントスペースを会場に、手描きによる地図と各館の情報を設置しました。足を止めて地図を見る観光客や市民の姿が見られ、効果的な情報発信を行

なうことができました。③ワークショップ&講座が大集合！は各館の協働の企画によるもので、各館について知り、体験できる事業とし、幅広い年齢層の参加がありました。④茅野市ミュージアム・コンシェルジュ講座では、山根教授に解説いただき各館を巡りながら、ミュージアムと観光の関係をさらに考えていく機会となりました。⑤ちのミュージアム・ピクニックは、茅野市内のミュージアムを知る入門的な機会となりました。ミュージアムと関連したおすすめスポットを紹介したこと、地域をより知る機会になりました。⑥シンポジウムは本年度の連携事業の総括的な位置付けで開催しました。ミュージアムから地域

の魅力をみつめ直し、その個性をどのように活かすかを考えました。

各館での個別の活動にとどまらず、「市民」がミュージアムと共に多様な文化資源を活かしながら、今後も引き続き、地域のアイデンティティを国内外に発信できるような環境を目指していければと思います。



②ちのミュージアム・インフォメーション  
会場:茅野市民館イベントスペース



③ワークショップ&講座が大集合！  
vol.3 茅野市尖石縄文考古館&茅野市美術館&京都造形芸術大学附康耀堂美術館「ヨークで縄文」  
会場:茅野市民館イベントスペース



⑤ちのミュージアム・ピクニック  
その3 茅野市八ヶ岳総合博物館、茅野市神長官守矢史料館  
おすすめスポット:御座石神社、島木赤彦生家跡(真徳寺横)、子神社、「木落し」坂、「川越し」の地、御柱



⑥シンポジウム「ミュージアムから出かけよう」

## 守矢真幸と武井真澄

武井真澄(しんとう　1875～1957)は、旧諏訪郡豊田村(現諏訪市豊田小川)で生まれ、その後、長野市で育ち、旧制松本中学校(現　松本深志高等学校)で学び、東京美術学校(現　東京芸術大学)を卒業しました。その後、松本中学校で講師を15年間勤めた後、退職して上京しました。

武井は、東京美術学校で鋳金を学びましたが、その後、山岳画家となりました。

守矢家第77代の守矢真幸(1883～1965)の日記などから、武井真澄と非常に親しく交流をもっていたことが伺われます。

武井真澄三男の武井勇氏によると、武井と守矢の出会いは、学生時代、東京にある諏訪の学生の寄宿舎である長善館だったといいます。

岩波書店所蔵の岩波茂雄宛守矢真幸書簡は、5通ありますが、いずれも武井の援助を岩波に依頼したものです。岩波茂雄(1881～1946)は、旧諏訪郡中洲村中金子(諏訪市中洲中金子)出身で、守矢とは、神宮寺学校時代からの幼なじみだったと考えられます。岩波も武井と面識があったようで、岩波も長善館に入出していたことが、守矢の日記に見えるので、その頃から関係があったと思われます。

武井真澄のことは、岩波茂雄の女婿である小林勇(1903～1981 岩波の次女 小百合の夫)の隨筆『彼岸花』(1968年文藝春秋社)に見えます。これによると、昭和6年(1931)、7年頃の話として、気象学者である藤原咲平(1884～1950)が武井を非常に高く評価しており、小林に購入する人を探して欲しいと依頼されました。武井は、非常にストイックな画家だったので、大変困窮していました。このことは、岩波宛の守矢の書簡でもこの記述があり、守矢の日記を見ても、武井の絵を売り出すのに奔走していることが記されています。

小林は、武井の絵を寺田寅彦(1878～1935)に購入を持ちかけようとしたが、断られたことを『彼岸花』に記しています。

藤原咲平は、旧諏訪郡上諏訪村で生まれ、岩波茂雄とは旧知の間柄でした。岩波宛の守矢の書簡にも藤原の名が見え、守矢と藤原は面識があった

ようで、また、武井と藤原にも面識があつたようです。

『彼岸花』の記述から、武井の絵を売り出すために、守矢だけではなく、藤原も尽力していたようです。

守矢と武井の交流は、武井の死の直前まで続いており、武井の御令孫である丸山みどり氏所蔵の昭和32年(1957)5月16日付武井宛守矢書簡は、武井の墓を、小川の武井家の墓地に建てるについてのものでした。守矢は色々手配して、武井真澄家の墓を作り、落成式を行い、

その写真を当時武井が住んでいた千葉県柏市に送っています。武井は、同年6月3日に柏市で没しています。

企画展「守矢真幸と武井真澄」は、平成27年8月8日から10月12日まで開催しました。当企画展では、守矢家所蔵の武井真澄の作品の他、小林勇の御令嬢である小松美沙子氏から、平成25年～27年にかけて寄贈していただいた、武井の作品5点を中心に展示を行いました。



飛瀑(武居真澂画 小松美沙子氏 寄贈)



山岳図(武居真澂画 守矢早苗氏蔵 当館寄託)

茅野市の博物館・文化財だより 八ヶ岳通信 No.34 発行年月日 平成28年3月31日

編集・発行 茅野市尖石縄文考古館	〒391-0213	茅野市豊平4734-132	TEL(0266)76-2270
茅野市美術館	〒391-0002	茅野市塚原1-1-1	TEL(0266)82-8222
茅野市八ヶ岳総合博物館	〒391-0213	茅野市豊平6983番地	TEL(0266)73-0300
茅野市神長官守矢史料館	〒391-0013	茅野市宮川389番地の1	TEL(0266)73-7567
文化財課 文化財係	〒391-0213	茅野市豊平4734-132	TEL(0266)76-2386